

恋する妹は甘酸っぱい





…気付いてよ、
お兄ちゃん!

●一章 妹だって一人でできるもん

女の子の尿道は、太くて短い。

それはそれだけ、おしっこを漏らしてしまうということだ。

「うう……またおぼんつ汚しちゃった……」

青木希美（あおきのぞみ）は、学校から帰って部屋に籠もると、セーラー服のスカートを捲り上げてショーツを降ろした。

もわ……っ。

ショーツの裏側から、ツーンとした蒸れた香りが立ち昇る。

家に帰ってきたらすぐに部屋に籠もってパンツを降ろすだなんて、思春期の女の子としてはちょっとどうかと思う。

だけど、希美には誰にも言えないコンプレックスがあったのだ。

そのコンプレックス――。

女の子の恥ずかしい染みを隠すための二重布……クロッチ……その裏側には、鮮やかなレモン色の染みができあがっていた。

それは紛れもなく、希美がチビってしまった証拠に他ならない。

授業中にくしゃみをしたときや、思いっきり走ったときにチヨロッと出てしまうことがあるのだ。

子供のころはそんなに気にしていなかったけど、さすがに思春期を迎えたこの年になっておちびりは恥ずかしい。

パンツを穿いていれば、希美はどこにでもいる女の子と変わらないのに。

黒髪をツインテールにして、ちょっと吊り目がちで、最近身体の丸みを帯びて……そんな、どこにでもいる少女だ。

だけど……。

そんな女の子のクロッチの裏側が、こうして鮮やかなレモン色に染まっているだなんて、誰が想像するだろうか？

希美の秘密の部分は、子供のままなのだ。

「我慢してるのになあ……なんで出てきちゃうのよ……」

クロッチの裏側を見つめながら、つい恨めしげに呟いてしまう。

ただでさえジツトリと汗で湿っているコットンショーツ……今日は体育の授業もあったし、天気予報では連日の猛暑だと言っていた。

おしっこをチビってしまうと、おまたが蒸れて痒くなってしまふ。

幸いなことに外側にまで滲み出してきたはいないけど、それでもこうしてチビってしまうのは希美のコンプレックスだった。

ショーツの外側から見ればピンクと白のしましま模様だけど、内側を見ればそこには希美の恥ずかしい思春期の染みが広がっている。

そして希美のコンプレックスはこれだけではなかった。

「今日も産毛のまま……」

ショーツを降ろして剥き出しになっている希美の秘部……そこは、やっとのことどうっすらと産毛が生えてきた程度の、ほぼパイパン状態だったのだ。

ふっくらとしたマシュマロのような美丘に、スツとカッターナイフを入れたクレヴァスが刻まれて、そこに一枚のピンクの花びらがちよこんと乗っかっている。

早い子だったら、小学生高学年のころには生えていた。

修学旅行のときにはクラスメートが大人っぽく見えて驚いたものだ。

けれども、その大人の証が、希美にはほとんど生えていない。

しかもおしっこをチビって蒸れてしまっ、赤ん坊のようなそこはほんのりと赤くかぶれていた。

情けなさ過ぎる。

「いつ生えてくるのよ……」

恨めしげに呟くも、そう簡単にニョキニョキ生えてくるわけもなく……思春期を迎えた縦筋は、ただ申し訳なさそうにヒクヒクと痙攣しているのだった。

(も、もしかして……)

毛根が死滅している……？

ということは、数えられる程度の毛根のままなのだろうか？

そんなことを考えてしまっ、ゾツとしてしまっ。

希美は現実から目を逸らすかのように、降ろしたショーツを穿き直した。

新しいショーツに替えてもどうせすぐに汚してしまっし、なによりも――。

「早くお兄ちゃんと釣り合う女の子になりたいのに……」

お兄ちゃんの名前は翔太という。

三つ年が離れたお兄ちゃんだ。

際だってイケメンって言うわけじゃないけど、希美にとってはとても頼りになる存在だ。今よりもずーっと小さかったころは、高いところにあるものを取ってくれたり、それに大きな犬を追っ払って助けてくれたりした。

希美が物心つく前に、お母さんが結婚したときにできたお兄ちゃんだから、直接は血は繋がっていないけど、それでも希美にとってはかけがえのない家族だった。

「お兄ちゃん……」

希美は呟くと、ぺたりとフローリングの床にお尻をついて座る。

そして恐る恐る、ショーツの上から秘部に指先を伸ばしていく。

その指先をゆっくと、少しずつショーツに食い込ませると、チリッと静電気が走った。

「はあ、はあ……んん……ふうっ、んんっ!!」

静電気に驚いて一瞬だけ指を止めてしまう。
それでも希美は指を動かしていく。

ふっくらとした秘裂を、シヨーツの上からなぞっていくと、黄ばんだクロッチが食い込んでいく。

縦筋が浮き上がり、希美の息づかいに合わせてヒクヒクと動いている。

「……んっ、はぁ……あっ、あうんっ」

おまたから生み出される、ピリッとした感触に声が跳ねる。

おまたに隠してある内緒のツボミが芽生えて、真珠が露わになったのだ。

女の子はみんなおまたに真珠を隠している。

それは誰にも触れられてはいけない、禁断の宝石だ。

もしも触れられてしまったが最後、二度と忘れぬことができない快楽の虜になってしまうだろう。

ここを触っていいのは……お兄ちゃんだけだ。

それなのに、希美の指先は泊まってくれない。

「あっ、あああ……っ、あふう……んっ、んんう……」

希美はシヨーツの上から、円を描くようにしてその部分を弄ぶ。

そうしていると、ドロツ、秘裂から熱い蜜が溢れ出してくる感触。

「ああ……お汁が……出てきちゃった……」

クロッチの裏側にヌルツとした愛液が貼りつくと、なんとも言えない背徳感が込み上げてくる。

「お。パンツ汚しちゃうなんて……痒くなっちゃうのに」

どうせおしっこをチビっていたのだから手遅れじゃないか……とは思うけど、それでもやはりイケナイことをしているのだと実感してしまう。

「染み、出てきちゃったよ……ふ、ふうっ」

女の子の恥ずかしい染みを隠すための二重布……クロッチの外側にまで、じんわりとした暗い染みが浮き上がってくる。

希美は、おしっこばかりか愛液までもおもらしてしまったのだ。

それでも指を動かしていると、クロッチに肉芽の輪郭が浮き上がってくる。

そこに触れてみると、

ツーン、

と電流が下半身を駆け抜けていった。

「ううっ、はぁあぁあぁっ」

あまりの刺激に、剥き出しになってる内股がヒクヒクと痙攣する。それだけおまたも痙攣しているというのだ。

「はぁっ、はぁっ、はぁう！ 熱いの溢れ出してきてる……っ、染み出してきちゃってるのに……っ」

それでも希美は指の動きを止めることができない。
むしろ、指を深いところまで食い込ませてしまう。

クチュクチュとコットンショーツのなかで愛液が泡立ってくる。

「男の人のおちん×んを入れるために……濡れるんだよね……？ だからおもらしたみたいにも濡れちゃってもいいんだよね……んん！」

言い訳をしながらも、希美の指先は止まらない。

「エッチなこととしてごめんなさい……。だけど、だれどおばんっこんなにしちゃったら……もう、気持ちよくなないと……ううっ」

希美はギュッと目を瞑って、快楽に震え上がる。

希美の脳裏に浮かぶ男性像は、いつも決まって兄だった。

ずーっと子供のころ、希美がまだ幼稚園でおむつが外れない頃に両親が再婚してきたお兄ちゃん。

いつもは頼りないのに、希美が落ち込んでいるときはいつも励ましてくれる。

希美がお兄ちゃんに恋心を抱くようになったのは、ごく自然なことだった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」

初恋であり、絶対に叶わない、禁断の恋だとは分かっているけど……。

それは分かっているけど、それでも希美は兄のことを考えながら指を動かしていく。

そうしているうちに、チリリッ、胸に静電気が走る。

「やだ、お胸もチリチリしてきちゃった……」

セーラー服の下から手を入れて、ブラに手を潜り込ませる。

思春期を迎えて、ほんの少しだけ膨らんできたおっぱいは、真夏の汗にしっかりとりと湿っていて、手のひらに吸い付いてくる。

ちよっとだけ膨らんできたおっぱいも、希美のコンプレックスだった。

おっぱいが膨らんでくると男子からデブだってからかわれるのだ。

しかもクラスの男子たちの視線が恥ずかしすぎるし、それにデブだと言われるほど大きくも膨らんでないし。

むしろ、貧乳と言っても差し支えないと思う。

そんな柔らかかな双丘に手のひらを這わせていくと……やっぱりだった。

(こんなにエッチになっちゃってるよ……私の身体)

手触りだけで分かる。

ピンクの頂はツンと勃起していて、指先で転がしてみると静電気が走った。

「んっ！」

ちよっと強くつまみすぎたか、自分でも驚くくらいエッチな声が漏れてしまう。

こうしていると、おまたがムズムズしてくる。

ただでさえ蒸れていたショーツの内側に熱い蜜が溢れ、ヒククッ、濡れそぼった柔裂がなにかを求めめるかのように痙攣した。

「おまたからエッチなお汁が溢れ出てるよ……もうお尻の方まで広がって……ペツタリ貼りついてきちゃってる……」

ショーツの上からではもどかしくなってきた。堪らずに希美はコットンショーツの中に手を入れる。

そこは熱いメレンゲに満たされていた。

「んっ、はあ……っ、はああ！　こんなにエッチなお汁が出て……大人の印、なんだよね……？　こうしてればおまたも大人っぽくなって……生えてきてくれたらいいのに……んああ、お、お豆……こんなにビンビンになっちゃってる、よお……！」

こんなに大人っぽいことをしているんだから早くおまたも大人っぽくなって欲しいと思う。

早くお兄ちゃんに釣り合う女の子になりたいのに……。

希美はそんなことを考えながらオナニーに耽ってしまう、エッチな女の子だった。

（おまたのなか、どうなってるんだろう？）

ふとそんな疑問が脳裏をよぎる。

いつもはお豆をいじって満足してるけど、おまたの中ってどうなっているんだろう？　学校ではペ、ペニス……を入れて受精するって習ったけど。

（ということは、おまたにおちん×んが入ってくるってということだよな？）

どんな感触がするんだろう？

蜜の溢れる柔裂に、指先を食い込ませていく。そして熱い蜜が溢れ出している肉洞を探り当てる。

「ここ、だよな。私の受精するところって……あっ、あっ、ああ……っ」

酸欠の金魚のようにパクパクと口を開きながら、肉洞の奥へ指先を潜り込ませていく。ちよつと狭いかも？

と黙っていたけど、奥に進むとちよつとだけ拓けたところに出る。

そこは温かい生命の泉だった。

（私の身体のなかって、こんな風になってるんだ……）

興味本位で身体を探っていくというのは、なんだか楽しいことのように思える。壁に触れてみると、ヒダヒダが指先に絡みついてきた。

（熱くてヌルヌルしてる……でもあんまり感じないかも？）

それにここって腫、だよな？

ここで男の人のお、おちんち……ペニスを包み込むのかな？

その割にはあまり触られてる感触がしないような……。

それはまるで探検ごっこだった。

ちよつとずつ指を奥へと進ませていくのは、知らない土地に踏み込むときと似たような感じがする。

こうして指を奥へと進ませていく、すると、

ツキーン、

おまたが裂けそうな、鋭い痛みに襲われる。

「う、うああ……な、なにこれ……」

驚いて指を止めると、その痛みも少しずつ引いていってくれた。

……これが処女膜、だろうか？

破れるときは痛いつて聞いたことあるし、多分そうなんだと思う。

(痛くない範囲で探検再開……)

ちよっとずつ指先を使って、痛くない範囲を探ってみる。

(やっぱりあんまり感覚ないかも？ これならお豆の方がビリビリきていいかも)

そんなことを考えながら、クイツと指を釣り針みたいに曲げたときのことだった。

ぞわり、

ゾクゾクとした寒気が込み上げてきて、全身に鳥肌が立ってしまう。

「や、やだっ、おしっこしたくなってきちゃった」

ただでさえおまたが緩くてチビってしまいやすいっていうのに。

まさかこんな時におしっこしたくなるだなんて。

ここでおしっこを漏らしてしまえば、本番でもおもらししてしまう女の子になってしまうかも知れない。

「それは、いやあ……っ」

女の子の尿道は、太くて短いのだ。

長さにして三〜四センチくらいしか無いと言われている。

三センチといえば、小指の長ささえもないのだ。

しかも尿道は真っ直ぐ下に伸びるような構造になっているし、ふっくらとしたおまたの尿道括約筋では、くしゃみをしたり思いっきり笑っただけでもチビってしまう。

それに、だ。

膀胱は子宮があるからその分だけ小さくなっていて、おしっこを貯められない構造になっているのだ。

それは、それだけ限界を迎えるのが早いと言うことでもある。

そのために女の子の恥ずかしい染みを隠すクロツチがあるのだが……。

希美のコットンショーツは、エッチなおもらしに暗く濡れそぼっている。

「おもらしは、だめえ……っ」

おしっこを少しでも我慢しようとおまたに力を入れる。すると、きゆうううううっ、指を入れている膣壁も引き締まった。

(あっ、こうやっておまたでおちん×ん、にぎにぎするのかな？)

自らの身体の変化と、昔お兄ちゃんと一緒に風呂に入ったときに見たおちん×んを思い出しながら、想像してみる。

……多分、そうなのだと思う。

おまたにこうやって力を入れて、おちん×んを握ってあげるのだ。……多分。

「おまたに力を入れて、こうやってお兄ちゃんを気持ちよくしてあげるんだ……」

そのことを想像すると、お腹の裏側が疼いてくるような気がする。

ここのあるのは……。

「子宮……？」

子宮が疼いているのだろうか？

お兄ちゃんのおちん×んを気持ちよくしてあげるって想像しただけで。

「子宮が疼いてるんだ……っ」

おまたに向けて眩き、クリトリスをギュツとつまんでやる。
すると、

ドプ……ッ、

熱くドロドロした体液が膣の深奥から溢れ出してきたではないか。

子宮頸管粘液……それは酸性に保たれている膣内を中和するために、女の子が漏らしてしまう本気汁だ。

こうやって溢れ出してきては、酸から精子を守ってくれるのだ。

希美は戸惑いながらも、兄のことを思いながら本気汁を漏らしてしまう。

「あっ、あっ、あああああ！ おぼんっ汚しちゃイケナイのに……ヌルヌルになっちゃうの……」

理性では分かっているけど、思春期の指は止まってくれない。

ドロドロとした本気汁にシヨーツが濡れそぼり、そしてクロツチから滲み出してきてしまふ。

「あっ、あうう！ 水たまりみたいになっちゃってるよお……っ、これ以上エッチなおもらししちゃいけないのに、いけないのに……きゆううううううん！」

希美は両手を股間に当てて、背筋を弓なりに反らせる。

「んっ、はあ！ おぼんっ、熱い……！」

おまたが痙攣して、本気汁がシヨーツの内側に満たされた。

厚手のコットンシヨーツでさえも吸収しきれないほどの愛液がフローリングに広がって、甘くネットリとした湯気が立ち昇っていく。

「き、気持ちよすぎて……うう！ おまたがキュンキュンって震えて……！」

こうやっておまたでお兄ちゃんのことを絞めつけるんだ……。

（本当は止めなくちゃいけないのに……！）

思うけど、昂ぶりすぎて、くしゃみが止まらないときのようにおまたが震え上がっている。



それに、

キュンッ、キュンッ！ おまたが震えるたびに火傷しそうなほどに熱い体液が溢れ出してきている。

「ほ、ホントにこんなところにおちん×ん入れて、うう！ んはあ！ だ、大丈夫、なの……!?」

まるで別の生き物のように一本筋のおまたが痙攣して、ドブドブと粘液を吐き出ししていく。

それでも指は止まらなくて、

「ううっ、はあああああああああああ！ も、もう……!!」

小刻みに動く指先にかき混ぜられ、クチュクチュと淫靡な音が鳴り響く。

コットンショーツの中に、本気汁がメレンゲのように泡立った。

それは今まで作ってきたケーキの、どんなメレンゲよりもふわふわしていた。しかもおまたに染みこんでくる。

「熱い……っ、おまたにし、染みる……よお！」

ふいに、ゾワリとした寒気が背筋を駆け巡っていく。

絶頂が近いのだ。

(あっ、大きいの……くる……！ きちやう……!!)

ゾクゾクとした快感に包まれて、それでも希美の指は止まらない。むしろ激しさを増して、深いところまで食い込んでいく。

「いっ、いっ、い……いいいいいっ！」

込み上げてくる絶頂……だけど、もうちょっと堪えて、味わっていたかったけど……一度スイッチが入ってしまったのは、どんなに我慢しても押さえ込むことはできなかった。

「いぐー」

希美は短い悲鳴を上げる。

と、M字に開かれていた内股がガクガクと震えだし、

プッシュアアアアアアアアアアアアアアアア！

ショーツの中でくぐもった水音。

希美はショーツを穿いたままだと言うのに潮を噴いてしまっていた。

ただ希美は潮などというものは知らない。そして潮噴きしていることを自覚する余裕さえも残されてはいなかった。ただ、

「うっ、うっ、うううううううううううううううう……!!」

若さ故のやり過ぎたオナニーに、ガクガクと腰を震わせている。

瞳からは涙がこぼれ落ち、あまりの激しさに舌を出しながら。

「あっ、ああああああああん！」

思春期の少女は絶頂を極めると、誰にも知られることなく思いつきり嬌声を上げるのだ。った。

「はあ……っ、はあ……っ、はあああ……っ」
くたあ……。

絶頂のあとの気怠げなひとときに身を任せ、身体の痙攣も少しずつ治まってきた頃、ようやく希美はくったりと弛緩した。

「す、凄かった……もうこれ以上は無理い……っ」

希美は快楽をもたらした指を、ショーツから引きずり出してみる。
又っ……。

希美の指先は、長風呂したときみたいにふやけきっていた。

気がつかないうちに、ずいぶんと長い間おまたをいじっていたらしい。

「……わたし、エッチな女の子なのかなあ……」

このままだとエッチなことばかり考えて、駄目な大人になってしまうかも知れない。
心配になってしまっけど、

「き、気持ちよかった……」

激しすぎるオナニーの余韻に、ちょっとした心配事なんて吹き飛んでしまっ。

それに今日は初めて指を入れてみたのだ。

お兄ちゃんが、おまたに入ってきたときにどんな感じがするのか予習をしたのだと思えば、保健体育の授業になる……と思う。

「うう、まだ動きたくない……やっぱり指を入れたからかなあ……」

絶頂の余韻に、腰が抜けてしまったとでも言うのだろうか？

いまだ身体の力が入らない。

キーンと耳鳴りがして、視界がぐるんぐるん回っている。

そしておまたを生温かい手で撫で回されている感触がして……。

「えっっ？」

もう指を抜いてるのに……？

思うけど、気づいたときには手遅れだった。

しよわわわわわわわわわ……。

ショーツから聞こえてくるくぐもった水音。

希美はおしっこを漏らしてしまっていたのだ。

「だ、だめえ……っ」

止めようと思っても、ヒクンッ、ヒクン……ッ、ショーツが食い込んでいる縦筋が、虚しく痙攣するばかりだった。

どんなにおまたに力を入れても、おしっこは止まってくれなかった。

ピンクと白のしましまばんつが、鮮やかなレモン色に染め上げられていく。

お尻を中心としてできてるエッチな湖は、更に大きくなってしまっ。

ツーンとしたアンモニア臭が、希美の部屋に満ちあふれた。

「も、もう……、おしっこ漏らしちゃうなんて……いや、だよお……っ」

ただでさえゆるゆるおまたがコンプレックスだっていうのに、気持ちよくなりすぎて漏らしてしまうだなんて。

しかも悪いことは続くようで……。

「希美ー、俺の漫画、どこに行ったか知らないかー？」

ガチャリと開いたドアから、兄が顔を出す。

いつの間にか学校から帰ってきたのだろう。

玄関の閉まる音も聞こえなかったのに。というか、耳鳴りがして気づいてなかった。

「の、希美……？」

兄の頬が凍り付く。

その視線はもちろん、Mの字に開かれた希美の股間に釘付けになっていた。

「お、お兄ちゃん……！ 見ないで、バカあああああああ！」

顔を真っ赤にして悲鳴を上げるも、お腹に力が入ってしまったのだろう。

希美の息づかいに合わせて、おしっこが一瞬だけクロツチから噴きだし……それからジヨボジヨボと間抜けな音を立てておもらしを続けてしまう。

「なんで急に開けるのよっ、お兄ちゃんのバカ！ エッチ！」

「いや、ちゃんとノックしたし。それに希美の大声が聞こえて心配になってだな」

「……！」

まさか声まで聞かれていたとは……！

顔がカッと熱くなる感触。きつと耳まで真っ赤になっていることだろう。

「お兄ちゃんのことなんか大っ嫌いなんだから！ バカ！ バカ！ バカ！ 早くどこかに行っちゃってよー！」

ひとりエッチしてる声を聞かれ、しかもおもらししているところまで見られてしまうだなんて……！

「大っ嫌い、どこかに行っちゃえばいいのに！」

心にもない酷いことを言ってしまう。

あんまりにも恥ずかしくて。

そして酷いことを言ってしまった自分が悔しくて。

「えっぐ……えぐぐ……お兄ちゃんなんて……お兄ちゃんなんてえ……もう嫌だよお……」

……うっつ、うっえええん……っ」

ついいは感情がない交ぜになって、希美は泣き出してしまふ。

そんな希美に、兄は……。

●二章 妹の花びらはおしっこくさい

翔太はパニックに陥っていた。

家に帰ったら読もうと思っていて漫画がなくなっていたので、どうせ希美が持って行ったのだろうと思って部屋のドアを開けたのだが……。

まさか妹がオナニーしているだなんて、誰が想像できるだろうか？

永遠に子供だと思っていた妹なのに。

それなのに、いつの間にかエッチな遊びを覚えていただなんて。

だけど希美だって思春期を迎えた女の子なのだ。

好きな男子ができて、一人で妄想を膨らませたりもするのだろう。

「わ、悪い。その……なんだ、漫画、取りに來ただけだから……でも忙しそうだからまたあとでくるからな！」

泣き出してしまった妹を見て、これ以上恥ずかしいところを見ているのは悪いかなど思ってしまう。

ドアを閉めて退散しようと思ったが……、

「待って」

希美に呼び止められた。

すすり泣いている希美は上手く喋れないのだろう。それ以上はなにも言うことはなかった。

ただ、しゃくり上げながら、なにか助けを求めるようにも見えた。

これ以上ここにいたら理性が飛んでしまいかも知れない……分かっているけど、翔太は部屋に踏みとどまってしまった。

「な、なんだ……？ さっきはどこか行けって言ったのに」

「うう……っ、知らないもん……お兄ちゃんのバカ、鈍感……ひっく」

希美はシクシクとすすり泣いている。

その姿が、兄を狂わせるとも知らずに。

おしっこ湖の真ん中で、ぺったりと尻餅をついてる希美……。

大胆にもMの字に開かれた股間からは、おしっこに濡れたコットンショーツが丸見えになっている。

濡れそぼっておまたにペタリと貼りついたショーツは、肉裂に食い込んでヒクヒクと痙攣を浮き上がらせていた。

未だ、絶頂の最中なのだろう。

パツクリと割れた希美の淫裂は、ヒク、ヒククンツ、男に見られているというのに、淫らに痙攣してしまっている。

(もしかして……)

翔太は一つのことを思い当てる。

(もしかして、希美はおまたを綺麗にして欲しいと思ってるのか?)

普通の兄妹なら考えられないことだと思うけど、希美はよくおもらししてしまう女の子だった。

子供のころはおもらし癖があつて、翔太がよくおまたを拭き拭きして、おむつを換えてやったものだ。

(もしかしたら、希美はそうして欲しいのかも知れないが……)

こうしている間にも、レモン色の海からは、ツーンとした恥ずかしすぎるアンモニア臭が湯気を上げ、希美を恥辱の泥沼へと引きずり込もうとしている。

「よし！ 決めたぞ」

翔太が覚悟を決めると、希美は気の毒なほどビクリとしてみせる。

こんな妹を一人で放っておけるはずがなかった。

洗面所に走って行くと、バケツにバスタオルをいっぱい詰めて、再び希美の部屋へ。

「希美、今からキレイキレイしてやるからな。立てそうか？」

手をさしのべてやると、

「う、うん……」

希美は膝を震わせながらも立ち上がる。

その足元にバスタオルを敷いてやると、恥ずかしい湖はすぐに消えていってくれた。

「……あとは、と」

希美の靴下を脱がせてやって、そしておしっこでビタビタになってしまった制服のスカートの脱がせてやる。

目の前に、妹の濡れたショーツが広がった。

子供のころから愛用している、ピンクと白のしましま模様のコットンショーツ。

それが鮮やかなレモン色に染め上げられている。

その光景が、今よりも希美がずっと小さかったころに見た光景とそっくりで、なんだか懐かしく思えてきてしまう。

(そうだ、希美は妹なんだ。だからなにもドキドキすることなんてないんだ……)

翔太は自分に言い聞かせるように、おもらしの処理を進めていく。

「パンツ、降ろすからな」

「うん……」

縦筋が食い込んでいるショーツを、ゆっくりと降ろしていく。

セーラー服だけの超ミニスカートみたいな格好にさせる。

剥き出しになった妹の秘部……そこは、マシユマロにスツとカッターナイフで切れ目を入れただけの、子供のころと変わらぬ幼い『おまた』だった。

肉裂から、ピンク色の花びらが、ちょこっと乗っかっている。

ほんのちょっとだけ生えている……大人になろうとしているようだったけど、希美のおまたはほとんど子供のときと変わらぬ佇まいをしていた。

妹のおまたは、いつまでもおしっこ臭いのだ。だからドキドキする必要なんて、全然無いのだ。そう思って油断した時だった。

「おや、これは……？」

降ろしきったショーツに、なぜかヌルリとした感触がしたのだ。

目をこらしてみると、ショーツの裏側に、透明な汁がヌメッている。

「も、もしかしてこれは……」

翔太はすっかり忘れていた。

希美はエッチなことをしていたのだ。

ということは、当然女の子の恥ずかしい汁もショーツにベッタリとついているわけで……

……

だがまさかここでビククリしてショーツを放り投げるわけにもいかない。

ただ、どうやってこの状況を打破しようかとフリーズしてしまふ。

……しかし、あまりにも長い時間ショーツを見つめすぎただろうか。

「そんなに見ないでよ……。私の恥ずかしいお汁……」

「べ、別に恥ずかしいことだとは思わないぞ。うん。そ、そうだよな、希美にだって好きなやつの人や二人、いるだろうしな！」

「す、好きな人……？」

「ああ。そ、そうなんだろう？」

って、俺はいつたいなにを話してるんだよ！ 妹のおかずのことなんか聞くなんて。

今のは聞かなかったことにしておいてくれ……言おうと思うけど、

「す、好きな人なら……いるよ？」

希美は真っ赤になりながらも呟く。

何故かこちらのことを見つめてきて。

「あ、ああ、希美にも好きな人ができたなんてな。お兄ちゃんは複雑な思いだぞ。希美ももう年頃の女の子だもんな。うん」

ついこの前まで、おむつを交換してあげていた妹なのに。

いつのまにかひとりエッチを覚えて、好きな男のことを考えていた……兄としては複雑だけど、妹っていうのはそう言うものなのだ。

いつか好きな男ができて、必ず兄の元から離れていくものなのだ。

こうやって、おしっこ臭いおまたを晒している妹も、気づかぬうちに女になっていたと言っことらしい。

そんな希美は、頬を赤く染めると、途切れ途切れ呟く。

「す、好きな人なら……いるもん」

どうせクラスの男子か、それとも部活動の先輩か……そんなところだろう。だけど。

希美は頬を赤らめながらも見つめてくると、

「わ、私の好きな人は……め、目の前に……いるんだもん……っ」

「えっ？」

目の前につて？

それってもしかして……。

予想外な一言に、一瞬わけが分からなくなってしまう。

それでも希美は、涙ぐんだ瞳で翔太のことを見つめてくる。

「……希美？」

声をかけてみるものの、希美は見つめてくるばかりで答えない。

なにかを待っている……のだろう。

おしっこ臭いと思っていた妹のおまたが、突如として甘い色香を漂わせてきているように思える。

クレヴァスに浮かぶ花びらが、思春期の朝露に濡れている。

実のところ、希美とはついこの前まで、一緒にお風呂に入っていた。

だから妹のおまたは見慣れたものだったけど……今ではその柔らかな肉裂が、とても背徳的なものに見える。

それはまるで誘っているかのように震え上がっていた。

「お、お兄ちゃんになら、なにをされても……いいよ？ 二人だけの……秘密……作りたいの……」

ぼつりと、希美の一言。

それが兄の理性を狂わせるとも知らずに。

「希美……綺麗に、してやるからな？」

「う、うん……」

小さく頷くと、ふっくらとした肉裂がキュウツとこわばる。

今までのように、キレイキレイされるだけではないと、希美も理解しているのだろう。

思春期の縦筋は、緊張して震えているようにも見えた。

(いつまでも子供だと思っていたのに……)

妹は、こうして見つめられている瞬間にも性徴しているのだ。

そんな妹の、女の部分は赤く火照っていた。

そこはどんな男でも惹きつける魔性を帯びているようにも思えた。

「希美のここから甘い匂いがしてきてるな」

「に、匂いなんて、嗅がないで……」

恥ずかしがる希美だけど、しかし朝露に濡れた。ピンクの花びらは、ヒクヒクと震えて男を誘っているようだった。

その花びらに鼻を近づけていくと、ツーンとしたアンモニア臭も漂ってくる。だがその恥臭さえも、男を惹きつける。

例え悪臭を放つ花であったとしても、それは何かしらの虫をおびき寄せるために完成された香りなのだ。

思春期の妹の秘裂からは、甘酸っぱくも刺激的な匂いが漂ってきている。

きっとこの合わさった肉裂の狭間には、もっと刺激的な匂いが凝縮されていることだろう。

体育の時間も、座学の時間も……この肉裂を汗が伝い、おしっこが滲み出し。

老廃物が秘裂にたまり、代謝の激しい思春期の秘裂で、人知れずに発酵熟成されていく。

希美のその部分からは、生臭くも甘酸っぱく、レアチーズケーキとも言われればそうだし、ピザと言われれば香ばしくも感じられる、そんな刺激的な香りを漂わせていた。

(これが希美の恥ずかしい香り……)

そう考えると、耳鳴りがして頭が痺れてきてしまう。

妹なのに。

いつまでも子供だと思っていたのに。

それなのに、気づいたらこんなに性徴してただなんて……。

目の前に晒されている柔裂に、翔太の理性のタガがパキパキと音を立てて弾け飛んでいく。

もう、匂いだけでは我慢できなくなっていた。

妹のピンク色の花びらは、どんな味がするのだろうか？

いけないことだと分かっているけど、好奇心の前ではどんな良心も吹き飛んでいた。

「……希美のここからいい匂いがする……」

鼻がくっつきそうになるくらいに秘裂へと近づいていき……そして。

ぺろり。

ついに我慢できずに、妹のそこに舌を這わせてしまう。

「ンン……ッ」

舌を這わせた瞬間、ヒクンッ、希美は身体を震えさせる。

けれども、すぐに力を抜いてくれた。

でも恥ずかしいみたいで、

「お、お兄ちゃん……？ そんなところ舐めたら汚い……よおっ」

「そんなことないって。希美のここから、甘くていい匂いがしてきてる」

「ああっ！」

希美のお尻がクイツと後ろに引かれる。

無理もない。

ふっくらとした柔らかい肉裂の、深いところまで舌を潜り込ませてみたのだ。

そこは、今まで感じたことのない感触と、そして味がした。

舌先をムニユツと圧迫してくる肉裂は、どんなにかき分けても舌にまとわりついてくる。そして肉の狭間からは、思春期の少女の爽やかな青春の味が染み出してきた。

こんなにピッチリと閉じた柔裂だ。

しかもおしっこや愛液もここから分泌される。

それに汗も流れ込んでいくのだろう。

それらが発酵し、塩が利いたチーズのような味わいが、ネットリと舌に絡みついてくる。

不味いか、美味しいか、どちらかで聞かれたら、正直なところそんなに美味しいものではないと思う。

だが、味覚以上に訴えかけてくるものがあつた。

「だ、ダメだよ、お兄ちゃんっ、今日、体育あつたから……恥ずかしいよ……っ」

恥ずかしがる希美……。

だが若々しい身体は正直だ。

肉裂は少しずつほぐれ、そして熱くなつてきている。

「希美のおまた……しょっぱくて美味しいな」

「そ、そんな……舌が、入ってきて……んんっ！ お兄ちゃんザラザラした舌が……はううっ、だ、だめえ……そんな恥ずかしいところ、舐めちゃだめえ……っ」

口ではダメだと言いながらも、しかし希美の両手は、兄の頭を股間へと押しつけようとしてる。

無意識のうちに気持ちいい、そう思ってしまったているのだ。

「あっ、ああああああ……っ」

希美の躊躇いがちなソプラノボイス。

ヒククンッ、秘裂が痙攣したかと思うと、ドロツとした透明な体液が溢れ出してきた。

これが愛液、なのだろう。

悪友から回ってきたエロ本で、それくらいのことには知っている。

女の子は、性的に興奮すると濡れてくるのだ。

こうして溢れ出してくるところを見るのは初めてなのだけど……。

(俺の舌に希美が興奮しているのか)

その事実には、頭がクラクラしてきてしまう。

いつまでも子供だと思っていた妹が、性的に興奮している……兄として、それは脳に響く事実だった。

「お、お兄ちゃ……っ、んん！ おかしくなっちゃう……っ、それ以上されたら、おまたがムズムズして……ううっ、おかしくなっちゃう……から……はうっ」

戸惑いながらも喘ぎ声を漏らす妹……。

その秘裂から溢れ出す愛液に、兄の意識は少しずつ白んでいく。

(お兄ちゃんがおまたを舐めてくれるなんて……っ)

それはとても嬉しいことだったけど、それと同時にとても恥ずかしいことだった。

コンプレックスのツルツルのおまたを見られてしまうし、それにおしっこ臭いおまたを舐められてしまうだなんて。

それだけでも恥ずかしくて、恥ずかしすぎて……。

それなのに、希美の身体は熱くなってしまふ。

「うっっ、そんなに奥は……っ、お兄ちゃんの舌がザラザラして……はうううう」

希美自身でも舐めたことのない場所なのに。

その兄に舐められるだなんて。

ザラザラとした舌が肉裂に潜り込んできて、誰も知らない恥ずかしすぎる肉の狭間を味わわれる。

「お兄ちゃんの舌っ、ザラザラして……んふう……っ。おまたがね？ おまたがね……？」

熱くなって、ぼんやりしてきて……あっ！ あっ！ あっ！

ぼんやりと白んできた意識のなか、キュンッ！ おまたが痙攣してしまう感触。

さっきひとりエッチをしたばかりなのだ。

それだけおまたが敏感になっている。

男は射精したら絶頂感がすぐに無くなってしまふけど、精液を絞り取るためにできてる女の子の身体はそうはいかない。

最後の一滴まで精液を受け取るために、絶頂が長く続くようになっていくのだ。



「お、お兄ちゃんっ、それ以上ペろされると……ううっ」

ピッチリと閉じていた肉裂が、少しずつほころんでくる。

兄の舌に気持ちよくなってしまっているのだ。

「希美の奥から、熱いのが溢れ出してきているぞ……？」

「あうっ、そんなの舐めちゃだめえっ、は、恥ずかしいよお……」

「そんなこと言っても、希美の汁、ほんのり甘くて頭が痺れてきそうだ」

「はうっ……」

愛液を飲まれて恥ずかしすぎるというのに、それでも身体は勝手に熱くなる。

むしろ、羞恥心に身体が興奮してきているようでもあった。

「やだっ、恥ずかしいのに身体が熱くなってきちゃって……あっ、あっ、あっ！」

イケナイと分かっているけど、兄の口に向かって恥液を漏らしてしまう。

その汁を、

ジュルジュルジュル……、

恥ずかしすぎる音を立てて飲まれていく。

おもらしをしたばかりの、不淨のおまたから溢れ出してきているというのに。

「はあ……っ、はあ……っ、はあああん！ すすらないでえ……っ、おまたから出てるの

に……っ、そんなところから出てきているの……っ、飲んじゃ、いやあ……っ」

頭では恥ずかしいと分かっているのに。

それなのに、一度燃え上がってしまった思春期の身体は、欲望のままに恥ずかしすぎる

よだれを垂らしてしまう。

「恥ずかしいお汁、飲まれちゃってる……ううー」「ぐくぐく飲まれちゃってるのに……っ、

あうっ、ま、まだ出る……っ、おまたがキュンキュンしてえ……っ。

あああああああ……」

突如、下半身をビリビリと電流が走っていく。

快楽に呼び起こされて、内緒のツボミが開いてしまったのだ。

「お、お兄ちゃん！そこはダメ！」

言い終える前に、兄の舌は容赦なくツボミを舐め回す。

ザラザラとした感触に、空席の膣が、きゆうううううう！ 引き締まる。

そしてドプリ……ッ、愛液よりも濃厚で熱い体液が溢れ出してきた。

……本気汁だ。

さっきオナニーで達したばかりだというのに、希美はまた絶頂を迎えようとしているのだ。

「あっ、あっ、アヒッ！だめっ、そこは強すぎるから！あううううううー」

包皮を脱いで、真珠のように勃起したクリトリス……それはとても小さな宝石だ。

だが小さいと言うことは、それだけ性感帯が密集していると言うことでもある。

そこは女の子の身体で、一番敏感な場所なのだ。

「あひっ、ひうううう！ ザラザラの舌が……あんっ！ 擦らないで……こすらないでえええっ、それ以上されたら、も、もう！ うっ、うううううう！」

思春期特有の、柔らかくもやや固さの残るお尻がプルンツ、と波打つ。下半身を稲妻が駆け抜けていき、お腹の裏側が切なげに痙攣する。オナニーとは違って、自分で触るのは比較にならないほどの快樂だった。自分でくすぐっても全然くすぐったくないのとよく似ている。

このままだと頭が真っ白になっておかしくなってしまうそうなのに。それなのに、

「お、お兄ちゃん、お兄ちゃん、おにいちゃあああん！」

兄の頭を両手でグツと掴むと、股間へと押しつけてしまっている。

マシユマロのようなつるのおまたに、兄の歯が食い込んでくる感触。

本当なら痛いはずなのに、その痛みさえも気持ちよく感じてしまっている。

昂ぶりにすぎた身体が、誤変換を起こしているのだ。

「あっ、あああ！ お兄ちゃ……ッ、そんなにしゃぶりつかれたら、おまたに歯形がついちや……あああん！ いいっ、いいよお！ もっと強く……強く噛みついて……えええええー！」

快樂を貪るかのように兄の頭を股間に。

希美を求めるかのように、兄はおまたにしゃぶりついてくれる。

「も、もう……お兄ちゃん……！ 気持ちよすぎて、気持ちよすぎて……と、飛ぶ！ 飛んじゃいそう、だよお！」

ガクガクと膝が笑い出し、お腹の裏側で子宮が切なげに震える。

絶頂が近いのだ。

(ど、どうしよう……っ、お兄ちゃんに気持ちよくしてもらって……恥ずかしいところ見られちゃってるのに……！ それなのに……、もっと恥ずかしいところ見られちゃう……うう(泣))

冷たい電流にゾクゾクと背筋が震え、一瞬だけ絶頂を躊躇ってしまう。

本当にこのまま兄の前で絶頂してもいいのだろうか？ と。

だがそんな躊躇も、圧倒的な快樂の前には吹き飛んでしまうことになる。

「あっ！」

希美は一際甲高いソプラノを上げてしまった。

クリトリスを、カリッと兄の前歯が引っ掻いたのだ。

敏感な宝石だから、皮に隠れているというのに。

視界に稲光が走り、身体中を稲妻が駆け抜けていく。

「あっ！ あっ！ あああああっ！」

こうなると希美は、目を見開いて嬌声を上げることしかできない。その口元からは、筋のよだれがツツと落ちていく。

もはやよだれを拭う余裕さえも残されていなかった。

「いつ、いぐ！ お兄ちゃああああ、ああああ！ イグッ！ いっちゃう、よおおお おおおお！」

キュッとお尻をつきだして身体を『く』の字に曲げ、それでも兄を少しでも感じようと股間に抑えつけ……希美は高らかに絶頂した。

絶頂の波に襲われるたびにお尻がぐんぐんと震え上がって、ツインテールが暴れ回る。

「んあっ、あああっ、いって、るううう！ お兄ちゃんにおまた舐められて……いってるうう！ おまたブルブルして、も、もう止まらない、止まらなくなっちゃってるよおお！」

おまたが痙攣するたびに、自分でも火傷しそうなほどに熱い汁が搾り出される。

そのすべてを兄にすすられて……希美の意識は白んでいく。

「いい……良かった……よ……お。お兄ちゃんにおまた舐めてもらって……気持ちよかったです……よお……っ」

なんとか伝えたかった言葉を残すと、希美の意識は絶頂の奔流へと消えていった。

「ぶはっ」

希美の両手から力が抜けて、やっとのことで翔太は柔らかいマシユマロから顔を離すことができた。

「危うく妹の股間で窒息させられるところだったぞ……」

眩くも、しかしその声は、希美の耳には届いていない。

希美は激しすぎる絶頂のあまり、気を失っていたのだ。

そしてぐったりと弛緩して、翔太へと覆い被さってきていた。

よほど気持ちよかったのだろう。

気を失っている希美の口元からは一筋のよだれがこぼれ落ちていて、ほっぺたはリンゴのように真っ赤に染まっている。

「とりあえずベッドに寝かせておいてやるか」

希美をお姫様抱っこしてあげて、ベッドへと仰向けに寝かしつける。

よほど体力を消耗したのか、希美は起きそうにはなかった。

オナニーで達したあとに、まさかのクンニで達したのだ。無理もないことだと思うけど。

「いつまでも子供だと思ってたんだけどなあ……」

眩きながら、ティッシュを手にとるとおまたを拭いてあげる。

そのおまたには、クツキリと翔太の菌形が残っていた。

さっきまで夢中になっていたとはいえ、ちょっとやり過ぎたかも知れない。

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ……妹である希美を、女の子として意識してしまう。

(ダメだ、ダメだぞ……いくらなんでも血が繋がっていないとはいえ……義妹を女の子と

して見ちゃうだなんて……)

ちっちゃい頃からおむつを交換してあげてた妹。

ついこの前までお風呂に入ってた妹。

そんな妹を、一瞬とはいえ性的に見てしまうだなんて……ちよっと自己嫌悪だ。

「希美はいつまでも俺の妹、だもんな」

「んんっ、お兄ちゃん……すー、すー……むにゆう……」

安らかな寝息を立てている希美の黒髪をひとすくい。

指を通していくと、甘いジャスミンの香りが漂い、それは翔太と同じ香りのシャンプー

で……。

どんなに可愛くても、希美は妹なんだという実感が湧いてくる。

翔太にとっては、希美は永遠の妹なのだ。

●三章 お兄ちゃんのこころ、舐めてみたいの

翌朝。

希美は、ジツトリとショーツがお尻にまとわりついてきている、気持ち悪い感触で目覚めた。

(やだ、おねしょしちゃった！)

慌てて飛び起きて、お尻を触ってみると、やはりだった。

希美のお尻は冷たくジツトリと湿っていたのだ。

だけどちよっと様子がおかしい。

シートにも世界地図ができあがっているはずだけど、それがなかったのだ。

それにこの匂いは、ツンとしたアンモニア臭ではなくて、もっと甘くてエッチなお汁のような気が……。

ここで希美は思いだす。

(そうだった、昨日はお兄ちゃんにおまたを舐めてもらって……っ)

舐めてもらって……だけど、そこからの記憶がハッキリしない。

もしかしたらそのまま気絶して眠ってしまったのだろうか……。

それにあんな非現実的で恥ずかしいこと、もしかしたら夢だったのかも知れない。

(そうよ、きっと夢だったのよ。ちよっとだけエッチな夢を見ちゃっただけで……)

そう思っただけでジツトリと濡れたショーツを、寝間着にしてるショーツと降ろすと

……、

「ああ……」

希美は大きなため息をついてしまった。

希美の幼裂はほんのりと赤らんでいて、しかも兄の歯形がクッキリと残っていたのだ。

ピンクの花びらは朝露に濡れて、ふんわりと甘い香りを漂わせている。

(夢じゃ、ないんだ……)

兄におまたを舐めてもらったのは。

……ということとは……。

昨日は兄にペろペろ舐めてもらった挙げてに気絶して、しかもそのあとショーツを……

そして寝間着を着せてもらった……ということになるのだろうか。

「は、恥ずかしすぎる……っ」

希美は思わず頭を抱えてしまう。

しかもクロッチの裏側にはヌルヌルのクリームが貼りついていて、どうやら寝ている間に気持ちよくなって、エッチなおもらしをってしまったらしい。

「自己嫌悪……なんであんなこと言っちゃったんだろう……」

お兄ちゃんになら、なにされてもいいよ、だなんて。

しかも私が好きな人は目の前にいるだなんて……っ。

「うううう。は、恥ずかしすぎる……っ」

お兄ちゃんにどんな顔をすればいいのだろう？

考えただけで、恥ずかしすぎて目が回ってきそうになる。

それでも身体ってというのは正直なもので、

……ぐうう。

どんなに希美が真っ赤になって悩んでいても、腹の虫が鳴いてしまうのだった。

ちよっとはムードっていうのを考えて欲しいものだ。

「……朝ご飯、作らないと」

父と母は、長期の海外出張に行っていて、今はこの家には翔太と希美の二人しか住んでいない。

だから家事は分担していて、朝食は希美が準備することになっているのだ。

「おぼんっ、換えたほうがいいかな……」

一瞬思うけど、洗濯は兄が担当しているのだ。

こんなにドロドロのショーツを見られるのは恥ずかしすぎる。

あとでこっそり自分で手洗いにしよう。

……いつもオナニーしたときはそうしているし。

心に決めると、

「んっ、ふうう……っ」

希美はヌルヌルのショーツを、おへそが隠れるくらいに穿き直す。

クロッチの裏側に貼りついてたエッチなクリームが、おまたに食い込んできて気持ち

悪い。

しかも冷え切ったショーツが、お尻にペッタリと貼りついてくる。

これは戒めなのだ。

もうお兄ちゃんに恥ずかしいことをお願いするのはやめよう、という。

寝間着を脱いで、セーラー服に着替える。

スカートを着いていれば、ちよっとくらいショーツが汚れていても分からない。

まさか希美がエッチなおもらしに濡れたコットンショーツを穿いているとは、誰も思わ

ないだろう。

部屋を出て、洗面所へ。

「変なところにニキビできてないよね？」

鏡に向かって問いかけて、バツチリスマイル。

うん、多分上手くできてると思う。

青春の必須アイテムであるところのニキビに効く洗顔料をグニッと指先に出して、冷たい水でバシバシバシヤと顔を洗って目を覚ます。

顔を拭いたら、黒髪をいつものようにツインテールに結わえ上げる。

そうすれば、いつもと変わらない希美がそこに立っていた。

「さて、と。朝ご飯の準備しないとねー」

セーラー服にエプロンを着けて、朝ご飯の準備を始める。

「ご飯は炊いてる時間が無いのでパンにしよう。」

それにふわふわ卵のプレーンオムレツと、野菜を千切ったサラダ、それにいつもの味のお味噌汁。お母さん直伝だ。

てきぱきと手際よく、十五分もすればテーブルに二人分の朝ご飯が並んでいた。

（これでお兄ちゃんの胃袋はバッチリ握るんだから……っ）

どんなに美味しいビーフストロガノフを作れるよりも、こうやって当たり前前の料理を毎日出し続けることこそが大切なのだと思う。

（そしていつかお兄ちゃんに振り向いてもらえたらなあ……）

思うけど、途端にどんよりとした気持ちになってしまう。

（うう……お兄ちゃんにおもらしたおまたを舐めてもらっただなんて……っ、思いだしただけで……っ）

ジットリと湿ったショーツが、ジュワツと暖かくなる感触。思いだしただけで濡れてしまっただけで恥ずかしい。

今日は替えのショーツを持って行ったほうがよさそうだ。

「自己嫌悪……」

それでも今から兄を起こしに行かなければならない。

普段は頼りになるお兄ちゃんだけ朝だけは弱いから、毎朝希美が起こすまで眠り続けているのだ。

「どんな顔すればいいんだろ……」

思いながらも、兄の部屋のドアをゆっくりと開ける。

兄はいつもと変わらず、ぐーすかといびきを立てて眠っているようだった。

その様子を見て、ちょっとだけホツとしてしまう。

もしもお兄ちゃんまで緊張して起きていたら、恥ずかしすぎて逃げていたと思う。

「お兄ちゃんったら、私が起こさないとずーっと寝てるんだから。仕方がないなあ、もう……」

ベッドに歩み寄って行って、兄の身体を軽く揺する。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……朝だよ？ 朝ご飯できたよ？」

声をかけても、兄はなかなか起きてくれない。

タオルケットを剥がしても、それでも目を覚まさなかった。

「まったくお兄ちゃんったら、朝だけは弱いんだから」

惰眠を貪ろうと徹底抗戦の兄に、ちょっとだけイラッ☆ ときてしまう。

さっきまでどんな顔をすればいいんだろう？

だなんて悩んでいたのがばかばかしく思えてきた。

こうなったら最後の手段、枕をすっぽぬくしか……思ったときだった。

「あれ？ なんだろう、これ……」

希美はあることに気がついたのだ。

仰向けに、大の字になって眠っている兄……その股間の部分が、テントのように膨らんでいたのだ。

兄の格好は、Ｔシャツにハーフパンツ。

股間をテントのように盛り上がりさせるものなんて、無いはずなのに。

「ポケットになにか入ってるのかな？」

てっきりポケットにボールペンでも入ってるのかと思って、テントの骨格をギュッと握ってみる。

あれ、なんだろう、プラスチックだと思ったのに、想像してたよりも柔らかいかも？ いや、固いことには固いけど……それになんだかあったかい？

「なんだろう、これ。お兄ちゃんったら、こんなに入れて寝てたら疲れ取れないだろうに。しかもなんだろう、だんだん大きくなってきてる気が……」

グニグニと確かめるように握ってみる。すると、

「うおおー！」

たったそれだけでお兄ちゃんは悲鳴を上げて飛び起きた。

あんなに呼んでも起きなかつたっていうのに、なんだったんだろう。

「の、希美…… お前なんで……っ」

お兄ちゃんは、起きたばかりなのに腰が抜けてしまったのか、ベッドにお尻をついてこちのこちを見上げてきている。

それでも、お兄ちゃんの股間のところにあるテントは大きいままだった。

「……あっ」

このときになってようやく気づく。

(も、もしかして今のは……お兄ちゃんの……お、おちん×ん……)

だとしたら、なんで固くなってるんだろう……？

「お、お兄ちゃん？ もしかして、お、おおお、おちん×ん？ ぼ、ぼぼぼ、勃起してるの……!？」

小学生の頃に習った。

男の人って、性的に興奮すると、おちん×んが大きくなるって。

実物は見たことないけど、もしかして、お兄ちゃんったら、せ、性的に興奮してるっていうこと、だよね……？

(なんでだろう?)

希美は首をかき上げてしまう。

かしげながらも、初めてみる大きなテントは、なぜか惹きつけられるものがあった。

「お兄ちゃん、興奮してるの……?？」

「こ、これはだな、違うんだ……、そ、その……希美!」

「お兄ちゃんも男の子だもんね。ぜ、全然気にしてないから……」

それに昨日はお兄ちゃんを誘惑してしまった。

もしかして、そのせいでお兄ちゃんはこんなに苦しそうにしているのだろうか？

「お兄ちゃんのおちん×ん、凄く苦しそうに震えてる……わ、私のせい、なの？」

「違うんだ希美、これは生理現象でだな……っ」

「ごまかさなくていいのっ。素直になっておちん×ん見せてよっ。兄妹なんでしょ？

それにこの前まで一緒にお風呂に入ってたから、お兄ちゃんのなら……見慣れてるもん」

ベッドが上がって、お兄ちゃんのテントへと手を伸ばす。

やっぱりだ。

お兄ちゃんのおちん×んは、苦しげに震えていた。

「お兄ちゃんは昨日、私のおまた、舐めてくれたから……全然恥ずかしくないよ？ 私が

お礼に、な、舐めて……あげるからっ」

意を決して、腰を抜かしているお兄ちゃんのハーフパンツをトランクスごと降ろす。

だけどそこから露わになったのは――、

「ひ、ひい!」

ぴよこんと顔を出したおちん×ん……それは希美が想像していたものとは、かなり違った変身を遂げていた。

(こ、これがお兄ちゃんのおちん×ん、なの？ う、うそ……凄く、大きくなってる……よおっ。一緒にお風呂に入ったときは、もっと可愛らしかったのに……っ)

それは思春期の少女にとっては、あまりにも大きすぎる凶器だった。

赤黒い先っちょはキノコのような形をしているし、棒の部分はビキビキと血管が浮き上がっている。

ついこの前……、お風呂で見たときは、こんなに大きくなかったのに。

「ペ、ペニスう……」

あまりにも禍々しい風貌に、思わず学校で習った単語がそのまま出てきてしまう。

おちん×ん、というにはあまりにもグロテスクすぎる。

(こ、これが私のおまたに入る……の？)

想像しただけでびっちりと閉じたおまたが、裂けそうな痛みで襲われる。

クロッチの裏側がジュワツと生温かくなる。おまたが傷つかないように、勝手に濡れてきてしまっているのだ。

それでも舐めてあげるっていったのに、嘘はつきたくなかった。

これもお兄ちゃんの身体の一部なのだ。

「こ、これがお兄ちゃんのおちん×ん……なんだ。凄く大きくて……凄く遅い、ね。大きくなくなってちょっと驚いちゃったけど」

怖いのを堪えてジッと見つめてみると、おちん×んは小刻みにピクピクと震えていた。

こんなに怖い見かけなのに、なんだか怯えているように見えてくる。

こうしてみると、可愛く見えてくるかも？

こんなに怖そうにしているのに、震えてるだなんて……。

思わず、お兄ちゃんのおちん×んを食い入るように見つめてしまう。

ツン、ツン……試しに指でつついてみると、猫じゃらしのように大きく揺れた。

「あはっ、お兄ちゃんのおちん×ん、なんだか可愛く見えてきたの」

「の、希美っ、なにするんだ、こんな汚いところ触るんじやありませんっ」

兄の狼狽ぶりも、可愛さに拍車をかける。

「怖がらなくて、いいよ……？ お兄ちゃんだって、私のこと舐めてくれたんだもん……

わ、私だって……。それに、お兄ちゃんに、汚いところなんてないから……」

竿の部分をギョツと手で握ってみる。

すると腰が抜けた兄は、苦しげに呻いてくれた。

……気持ちいい、のだろうか？

「棒の部分が気持ちいいの？ ギョツとして……あ、なんだか震えてきた……」

ぷにぷにと柔らかい手で握ってみると、肉棒がムクムクと太くなってくる感触。

きつと気持ちいいのだ。

それに、

「お兄ちゃんの先っちょから、透明なお汁が出てきてる。お、おしっこと同じ穴から出てきてるけど……気持ちいいの？」

「あ、ああっ、それはカウパー液と言ってだな、これ以上されると……や、やばいから希美、離れるんだっ」

「やだもん。昨日舐めてくれたから……それに、私もなんだかポワツとしてきちゃったよ……」

オチ×ポをにぎにぎしていた手の匂いを嗅いでみる。

そこからは優しい若草のような香りが漂ってきていた。なんだかこの匂いを嗅いでいるとポーツとしてきて、それに耳鳴りがしてくる。

「お兄ちゃんのカウパーお汁……どんな味がするんだろ……」

ネコのように小さな舌を出して、恐る恐る、透明なお汁を舐めてみる……ちろり。

「あっ、あうううう」

その瞬間、脳に電流が走った。

カウパー液は、ガムシロップのように微かにネットリとしていた。

量が少なすぎて舌の上で消えてしまうけど、ちょっとだけ海水というか、汗が混じった味がする。

それに後味はちょっと苦いかも……？

「もっと、もっと……」

これだけじゃ足りない。

もっと味わってみたい……そんな、癖になる薄味がする。

「ペロ、ペロペロ……おちん×んの先っちょ……なんだか美味しいよ？ はあ、はあ……んっ、薄味なのに、溶かされちゃいそうだよ……」

皮が剥けた亀頭をペロペロと舐めていくと、ちよつとずただけどガムシロップが溢れ出してくる。

それを逃すものかと希美は舌ですくい取っていく。

「や、やめるんだ、希美……っ、それ以上されるとホントに……っ」

兄の声も、どこか遠い世界のように思える。

希美は、大胆にも舌を絡みつかせるようにフェラチオしていた。

「お兄ちゃん、美味しい、よお……。どうしょ、もっと、もっと味わいたい……おちん×んがこんなに美味しいだなんて……っ」

気がつけば、ちん×んは希美のよだれ塗れになっていて、朝日を浴びて妖しくぬめっている。

希美がここまでイヤらしくしてしまったのだ。

「はふ、はふう……。おちん×ん……凄いエッチ……私のよだれでこんなにエッチになっちゃうなんて……気持ちいいの？ ペロペロされて……気持ちいいの？」

「あ、ああ……希美の舌、ネコみたいにザラザラして溶かされそうだ。だからこれ以上は、もう……っ」

「ダメだよ？ 私だってもう我慢できないんだから……」

上目遣いで見つめて、いたずらっぽい笑みを浮かべる。

もう希美のショーツは、愛液のおもらしでグショグショになっていた。

おまたに食い込んでいるクロツチは、物欲しげにピクピクと震えていることだろう。

希美はちろりと舌を出すと、肉棒を愛でるように舐めはじめ。

「れろ、れろれろ……んっ、ふう……。ああ、先っちょからお汁がドロドロ溢れ出してきた……す、凄い、凄いよお……っ」

ただでさえ苦しげだった肉棒が、ビクビクと不規則に痙攣しはじめ。

（もしかして、お兄ちゃん、イきそうなのかな……？ おちん×んのはよく分からないけど、カウパー液の量も多くなってきた……）

れろれろ、ペロペロ……希美は舐めながらも、どこか兄の身体の変化を楽しんでいる。

（学校の授業では……男の人って気持ちよくなると射精？ するんだよね。実際に見たことないけど、どうなるんだらう？）

どうやって射精するんだらう？

精液が出るって、授業では習ったけど。

おしっこ穴から出てくるのかな？

最後はきつと射精で終わるんだよ、ね？

思いながらも男根を舐めているけど、だげど兄はなかなか射精してくれないようだった。

(もしかして、気持ちよく……ない?)

それはそれで、ちよっとシヨックだった。

舐めてるだけじゃダメなんだろうか。

(勃起してるけど……どうすれば射精してくれるんだろ? おまたに入れて受精するっていうことは、おちん×んはおまたのなかに入れると気持ちいいんだよね? っていうことはおまたみたいにすればいいって言うことだから……)

希美のよだれでテカテカになっているおちん×んは、例えるなら愛液で濡れてるだけな状態なんだろうか。

(ということは、おまたに入れてるようにすればいいんだから……)

キュンッ、おちん×んがおまたに入ってきたところを想像する。

それだけで、ピッチリと閉じた肉裂からよだれが垂れてきてしまう。

(そうだ……きつと絞めつけが足りないんだ。きつと私のおまた、キツイと思うし……そうか、それなら……)

思春期の少女の妄想をフル回転させて、どうすれば射精してもらえるかを考える。

きつとおちん×んを絞めつければいいのだ。

それなら手を使うか、それとも……。

妖しくめめつている男根を見つめ、手を使うだけでは足りないような気がしてくる。

それに、もつと兄のことをいっぺんに味わってみたかった。

そして包み込んであげたい。気持ちよくなって欲しい。

(お兄ちゃんだって、私のおまた舐めてくれたんだもん。おちん×んもこうやってあげた方が気持ちいい……よね?)

「ちよっ、希美!」

戸惑う兄の声。

しかし希美の決意は固かった。

「はあはあ……は、はふう……んっ、んんうう……」

熱い吐息を吹きかけながら、少しずつ男根を口のなかへと飲み込んでいく。

喉の奥にまで亀頭が入り込んでくる。

兄の肉棒が大きすぎるのだ。

それでもここでむせるわけにはいかなかった。もしもむせれば、小さいとはいえ歯が当たってしまう。

「はふ、はふう……お、お兄ちゃんの、おひんひん……大きすぎて……はふ、はふんっ、

しゅ、いよ……喉の奥まで……お、おげっ」

「無理するなよ、希美」

「む、無理ひてなんか……ないもんっ。とつても美味ひいもん……も、も「も」っ」
肉棒を根元まで啜え込む。

ささやかな達成感に満たされると、口腔に生臭い香りが蒸れる。

舐めているときとは比べものにならないほどの、男の人の味がした。

(これがお兄ちゃんの香り……!! うぷっ、す、凄すぎて……うっ、うぐう!)

濃厚な香りに涙が溢れ出してくる。

悲しくもないのに……むしろ、飛び上がりたいくらい嬉しいのに。

勝手に涙がこぼれ落ちてきてしまう。

「お、おい、泣くほどイヤなら止めても……っ」

「イヤなんかじゃ、なひよ? 見ててね、お兄ちゃん……んっ、れろれろ、チュピ……んっ、はふ、はふう……」

口のなかで男根に舌を絡みつかせる。

亀頭にカリ首、そして裏筋……希美はその名前を知らないけど、丹念に舌でねぶって兄の輪郭を感じていく。

(す、凄い……お兄ちゃんのおちん×ん、こうして啜えると凄く大きく感じるよお……それにビクビクしてるし……っ)

口のなかであってもカウパー液が出ているのだろう。

ネットリとしたガムシロップが口腔に広がっていく。舌に絡みついてくる。

「も、もっひよお……もっとお汁、ほひいのお……んちゅ、れろ、れろ……んっ、ちゅううううう……んっ、ふおおおおお……」

おしっこと同じ穴から出てきてるはずなのに、こんなに美味しいだなんて。

希美の脳は、兄の生臭い香りに溶かされていく。

それにぐちゅぐちゅと口のなかで兄を感じてると、脳を冒されているような気さえしてくる。

本当のエッチは経験したことがないけど、ここまでダイレクトにおちん×んの淫音を聞くことができるのは、口でしてあげる特権なのだと思う。

その快感に抗議するかのように、ショーツの中がジクジクと生温かくなる。

クロッチからは、おもらしのように愛液が滲み出してきていた。

フェラチオをして、また希美も感じてしまっているのだ。

(ああ、ダメ……夢中になり過ぎちゃう、お兄ちゃんにエッチな女の子だと思われちゃうのに……やめられない、美味しすぎてやめられない、よお……!!)

ついに希美は舐めているだけでは飽き足らず、カウパー液をおねだりするかのようになり、ちゅーちゅーと吸い始める。

頬肉の裏側をキュウウツ、と密着させ、裏筋を舌で圧迫。

「んっ、ちゅううううううううううう……!!」

この瞬間、兄を想うあまりに、希美の口は擬似的な膣と化す。

男根を溶かそうと、熱い唾液が溢れ出した。

「うおお、希美い……!! どこでそんなこと覚えたあ!!」

よほど危ないのか、兄が頭を抑えつけてくる。

それでも希美は男根から口を離さずにバキュームフェラチオを続ける。

ビククツ、肉棒が震え上がると、今までとは比べものにならないほどのカウパー液が溢れ出してきた。

絶頂が近いのだろう。



「はふはふ……お兄ちゃん……いって、いいよ？ 希美のお口で気持ちよくなって、いいよ？」

「やめるんだっ、口に出しちゃうから！」

「お、お兄ちゃんの精液なら……飲めるよ？ お兄ちゃんのこと……」
大好きだから、とは恥ずかしくて言えなかった。

その代わりに、ごまかすようにして肉棒に吸い付く。

頬肉の裏側を使って、舌を絡ませ……そしてストローのように吸い続ける。

（私のおまたみたいにキュウウツて、絞めつければ気持ちよくなれるんだよね？ 私のお口をおま×こみたいに使って……っ）

思春期の少女は、想像するがまま、本能的にバキュームフェラチオを続ける。

その力たるや、牽丸さえも吸い取ろうと言わんばかりに。

「う、うおおおっ、そんなに吸われると……出る……！ 希美、離れるんだ……！」
そんな兄の声を無視して、希美はバキュームしていき……ドクツ！

肉棒が大きく脈動する感触。

ついに兄は達したのだ。

（やった、お兄ちゃん、気持ちよくなってきたんだ……！）

達成感を味わうのも束の間、それは起きた。

ビクッ、ビクク……ビュルルルル！

（えっ、ちよっ、お兄ちゃん、そんなに暴れられると……！）

お口に収まっている男根が暴れ出したかと思うと、勢いよく喉の奥へと向かってマグマを噴き出したのだ。

（射精ってこんなに激しいの？ お口の中で噴火してるみたい……！ う、うぐっ、熱いのが溢れ出して、匂いもおお！）

苦しさのあまり、鼻から空気を抜いたのが間違だった。

生臭い香りが鼻孔に満たされ、

「おっ、おげえっ」

思わずむせてしまう。

それでも肉棒を啜っていたのは、それだけ兄のことを大事に思っていたからだ。
鼻からダラリと精液が溢れ出してきた、口も鼻も、生臭い香りに満たされる。

「お、おい……、無理するなよ。まずかつたら吐いてもいいんだぞ？」

兄が気を遣ってくれるのは嬉しい。
だけど。

「んっ、んんん……」「くり」

気合で飲み込むと、酷く喉に絡みついてくる。

それでも唾液で薄めて飲み下すと、カッと胃が熱くなった。

これから兄の精液が消化されて、希美の身体の血となり肉となるのだ。

その血液は脳内も巡って、希美のことを染め上げていくのだろう。そう考えるとお腹がキュンッ、と切なくなる。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

にゅぷり……啜え込んでいた男根を離す。

未だ固くそそり立っている男根は、希美の唾液に塗れてとてもエッチに見えた。

「飲めた……よ？ お兄ちゃんにお口、捧げちゃった……はふう」

「まったく、無茶するなよ。お腹壊したらどうするんだ」

「お、お兄ちゃんのならお腹壊しても平気だもんっ」

口を離すと、急に恥ずかしくなってきた、プイツとそっぽを向いてしまう。

「き、気持ちよかった……？ 私のお口の中……」

「き、気持ちよかった……？ 私のお口の中……」

「き、気持ちよかった……？ 私のお口の中……」

「ああ、気持ちよかったぞ。だけど無理はするなよ？ こういうのは、希美がいつか好きな男の人ができたときに取っておくものだと思うから」

「う、うん……」

好きな人なら目の前にいるのに……。

言いたいけど、兄のことだ。スルーされそうで怖い。

だから言葉じゃなくて、せめて行動で示してあげたかった。

「お兄ちゃんのおちん×ん、綺麗にしてあげるね♪」

「え？ い、いって。ティッシュで適当に拭くからっ」

「だめ。お掃除してあげるんだから」

兄のおちん×んは希美のよだれにまみれているし、それに白くドロドロした液体……多分これが精液なのだと思う……が絡みついていた。

「んっ、れるれろ……ちゅっ、ちゅううう……」

フェラチオをするときよりも優しく舐めてみる。

「ただど達したばかりで敏感なのだろうか。兄のちん×んは小刻みに痙攣して、ビキビキと血管が浮き上がっていた。」

「なんだか今にも出てきそうな感じにみえる。」

（男の人って、急にしゃ、射精するから分らないよね……）

思いながらも精液を舐め取っていくと、やっぱり兄に止められてしまう。

「ストップ、希美、もういいから……、それ以上されるとまた出ちゃうからっ」

「私は全然いいよ？ お兄ちゃんが出した分だけ、全部飲んであげる」

「無茶言うなよ。希美の制服も、髪の毛も汚したら大変だろ？ これから学校に行くんだし」

「そ、そうか……そっだよね」

「ついで夢中になって、これから学校があることをすっかり忘れていた。」

拭き取ってあげるんだから」

新しい精液が出てしまったけど、その分まで綺麗に拭いてあげる。

こうしてキレイキレイしてあげ終わったころには、希美の子供っぽいショーツはザーメ
ンでドロドロになっていた。

そんなショーツを見ていると、イケナイことをしてしまったんだ、という実感が今更な
がらに湧いてくる。

「凄い……お兄ちゃんの精液でおぱんつがドロドロになっちゃってるよ」

「ああ、でもおかげで綺麗にはなったがな……」

幸いなことに、二回出したおちん×んも落ち着いてくれたみたいだ。

あんなにも凜々しく立っていたのに、象さんのように垂れ下がっていた。

「おちん×んって不思議なんだね。さっきまであんなに大きくなってたのに。ツンツン」

「こら、つかないのっ」

兄はトランクスを上げると、さっさと制服に着替えてしまう。もうちょっと見ていたか
つたのに。お兄ちゃんのケチ。

でもこうしている間にも、朝の貴重な時間は過ぎていくのだ。

まさか兄妹揃って遅刻するわけにもいかないし。

「私もおぱんつ穿かないと」

希美は呟くと、手に持っているコットンショーツを広げてみる。

ただでさえクロッチの裏側には、希美の愛液がネットリと貼りついてたというのに……

クロッチの裏側は兄と希美が混じり合ってドロドロになっていた。

クロッチだけではない。

前も、そして後ろも精液でネバネバしている。

(凄い。パンツ広げたら、お兄ちゃんの匂いも広がってきてる……)

ホントだったら洗濯しなくちゃいけないんだろうけど……。

精液でドロドロのショーツを見つめていると、このまま洗うのはもったいなく思えてき
てしまう。

(学校から帰ってきて楽しむ……？ けど、そうするとカピカピになってそうだし……う

ーん、どうしよう……)

希美はパンツを広げながら悩みに悩みこむ。

(よし、決めた)

このショーツには、兄の温もりが残っているのだ。

「……んっ」

希美は、ゆっくりとヌルヌルのショーツに足を通していき、おへそが隠れるくらいにま
で上げる。

「あう……。お兄ちゃんのヌルヌルが、おまたに食い込んでくるよ……」

生温かい精液が、おまたに食い込んでくる。

たったそれだけでおまたが溶かされてしまいそうだった。

「おい、汚いから早く脱げって」

「お兄ちゃんに汚いところなんてないもん。そ、それに……こうしているとお兄ちゃんどうっといられるみたいで……嬉しいんだから」

「俺ならずと一緒にいるだろ？」

「そういう意味じゃないのっ。お兄ちゃんったら鈍感なんだから！ さ、早く朝ご飯食べちゃおう？ ちゃんと食べないと身体に悪いんだからっ」

希美はベッドから降りると、くるりとスカート回してみせる。

大丈夫、ちよっとくらい跳んだり跳ねても、まさかザーメンでドロドロになっているコットンショーツを穿いているだなんて、誰も思わないだろう。

「髪の毛、ぼさぼさになってるぞ」

うしろに立った兄が、黒髪のツインテールを梳いてくれる。その優しくも力強い手が、希美は昔から好きだった。

「あ、ありがとう、お兄ちゃん……」

兄のさりげない優しさにドキッとしてしまう。

ただでさえ、口のなかには兄の香りが残っているというのに。

「あ、あうっ……」

ショーツの内側がジュワツと生温かくなって、ついついよろめいてしまう。

ダメだ、まだベッドから降りたばかりだというのに。

幸せすぎてフワフワしている。

（今日はお兄ちゃんと、ずっと一緒なんだから……えへっ）

希美はシャンと背筋を伸ばして歩き出す。

女の子は、ちよっとくらいショーツを汚してしまっても、平然としていないといけないのだ。

● 四章 授業中におもらし……

希美は大好きなお兄ちゃんの匂いを纏ったまま学校へと登校した。

……だけど、さすがにちよつと度が過ぎてしまっていたようで……。

「お、おまた……痒い、よお……」

四時間目の授業が終わって、昼休み。

希美はお弁当を食べたあとに、おまたのかゆみに耐えきれなくなってトイレへと駆け込んでいた。

「ふう……」

個室のドアを閉めて一息。

希美は洋式のトイレに腰掛けると、額の汗を拭った。

真夏の女子トイレは、甘いアンモニア臭が熱く蒸れている。

だけどそんなことよりも今の希美には、股間から生み出される痒さの方が重要だった。

スカートを捲り上げると、

モワッ……、

甘く蒸れた香りが立ち昇る。

ピンクと白のしましまのコットンショーツは、ところどころ兄の精液が発酵して茶色いまだら模様ができあがっていた。

そんなショーツの恥ずかしい染みを隠すための二重布……クロッチは、すでに力尽きてしまったようだ。

おまたから溢れ出してきたお汁が、クロッチの外側にまで滲み出してきた。そしてやはり発酵していて、茶色く変色していた。

「うう……おまたヌルヌルして気持ち悪いよお……」

顔をしかめて、ゆっくりとショーツを降ろして行くと――、

ぬっちょおおおおおおお……。

「う、うわあ……」

それは希美でさえも言葉を失ってしまうほどの惨状だった。

おまたとクロッチの間に、納豆のような糸が引き、夏の蒸れた空気に消えていく。

愛液と精液にまみれたクロッチ――。

そこにはまるでモンブランケーキのクリームが貼りついているようだった。

愛液と精液が混じり合い、そして発酵してクリーム状になってしまったのだ。

どうりでおまたが痒いわけだ。

「おまた痒い、よお……」

ヒクク……ッ、おまたが痙攣すると、ジュワリと透明なお汁が溢れ出してくる。

かゆみさえも、今の希美にとっては快楽へのスパイスに過ぎなかった。そんな希美のショーツは、お尻の方にまで茶色い染みが広がっている。

授業中、椅子に座ったまま愛液が漏れると、縦筋を伝ってお尻の方に広がってしまう。お尻の染みは、授業中に興奮してしまった恥ずかしい染みなのだ。

そんな恥ずかしい染みを作り出してしまった、希美の秘筋――、
「こんなになってたなんて……」

自らの秘裂を見て、希美は言葉を失ってしまう。

思春期の秘裂……、そのふっくらとした膨らみかけの恥丘は赤くかぶれていて、そして内緒のツボミも開花していた。

兄の精液に反応して、クリトリスが目覚めてしまっていたのだ。

産毛がちよこんとしか生えていないから、その惨状が丸見えになっている。

「もうビンビンだよお……どうりでおまたがピリピリすると思った……」
どうしよう。

一応、カバンには替えのショーツを持ってきてあるけど。

でも、もうちょっとお兄ちゃんと一緒にいたいし。

「とりあえず拭いておくだけにしとこ……」

女の子の肉裂は、身体で一番汚れが溜まりやすくて恥ずかしい場所だと思う。

ふっくらとしてデリケートだし、作りも複雑だし。

しかもピッチリと閉じている。

汗も、おしっこも、そしてエッチなお汁も溜まりやすい。

「ん……ッ」

顔をしかめながら、ティッシュを肉裂の奥まで潜り込ませて……ぐにぐに。

こうして拭いてみると、ティッシュにはモンブランクリームのような恥ずかしいものがメッターと貼りついてた。

（お兄ちゃんに、こんな恥ずかしいところ舐められちゃったんだ……）

どんな味がするんだろう？

思ってしまうけど、ちょっと自分では怖くて舐められない。

希美は目を逸らして、汚れたティッシュを水に沈めた。一回では綺麗にできなかったので、もう一度ティッシュで拭うけど、

「んっ、ふっ……」

鼻から色っぽい息が漏れて、自分でも驚いてしまった。

チリリ……ッ、

肉芽がティッシュに擦れて、真夏の静電気に内股が波打つ。

ずっとお兄ちゃんのお汁をおまたに浸していたのだ。昂ぶっているのも無理はないけど

……。

「ダメ、学校なのに……」

眩きながらも、しかし一度火がついてしまった瑞々しい身体は収まってはくれない。ちよっとでも身じろぎをすると、チリチリとした痛みがおっぱいから発せられた。

「学校なのに……乳首、立っちゃってるよ……」

セーラー服の上から抑えてみると、ブラジャー越しても分かった。

そこは確かに、ツーンと上向いているようだった。

「ダメだよ、触っちゃダメなのに……」

思春期の膨らみはじめたばかりの乳房は、コンニャクのように硬い。乳首なら尚更だ。そこを指で押さえつけると、ジンジンとした疼痛が込み上げてくる。

触ってはいけない……。

分かってはいても、指の力は強くなってくる。

「はあ……、はあ……、はあ……っ」

個室の外にまで熱い吐息が聞こえていないだろうか？

ちよっと心配だけど、こうなると止めることはできなかった。

希美は乳首とクリトリスをいじりながらも、イケナイ遊びに夢中になってしまっている。この小さな身体に燻っている種火を消しておかなければ、午後の授業でおかしくなってしまうに違いなかった。

「ううっ、ずっとお兄ちゃんを感じてたから……す、凄い感じる……う！ 凄い、凄いよお……っ、お兄ちゃんの匂いのせい？ こんなにおまてもお胸もジンジンするなんて……せ、切なすぎる……ああ！」

上半身と、下半身の肉芽をいじりながらも、希美は一気に昇り詰めていく。

セーラー服のうえから、勃起した乳首を押し潰すような、乱暴な愛撫。

こうすると制服がシワになってしまっけど、今の希美には我慢することができなかった。ヒククツ、秘筋が震え上がると、ドロツとしたよだれがイヤらしく溢れ出してきてしまっ。

それは誤魔化しようのない本気汁だった。

学校のおトイレに淫汁を垂らしてしまっなんて。

「学校で、お、オナニーなんかしちゃダメなのに……んふっ、ああっ、もう指が勝手に動いて……ううっ、お汁、止まらない……よお……っ」

洋式トイレの水面に、ポタポタとエッチな汁が垂れていく。

もしかしたら隣の個室で、誰かが息を潜めているかもしれないのに。

希美の息づかいも、エッチな水音も聞かれてしまっているかもしれないのに……それでも希美は指を止めることができなかった。

むしろ加速度的に、そして小刻みに動いてしまっ。

こうしているうちに快楽が電流となって背筋を駆け抜けていき、ゾクゾクツ、悪寒を堪えるかのように身体を震わせると――、

「いっ、いぐ！ も、もう……イツ、イツ、イイイ！」

それなのに、もう手を上げてトイレに行かせて欲しいだなんて、恥ずかしくて言えるはずもなかった。

(うう……、い、いやあ……っ、おまた緩んじやってるの……！？)
ジヨ……！！

ひとりエッチに緩んだおまたから、生温かい液体が漏れてしまう感触。
希美はおしっこをチビってしまったのだ。

(いやっ、これ以上は……！)

昼休みはオナニーに夢中になるあまり、気づいていなかった。

希美の膀胱は、水風船のように膨らんでいる。しかもこうして我慢している間にも、一滴ずつ膀胱には毒素が濾過されているのだ。

キュツとおまたに力を入れるも、女性器の尿道括約筋は、あまりにも貧弱すぎる。

男の尿道は約二十センチもあるのに対して、女性器は三〜四センチほどしかない。

しかもスツと真下に伸びるような構造になっているし、子宮があるだけ膀胱が小さくできている。

それだけ頻繁に尿意を感じやすいと言っことだ。

(うっ、ううう！ あと五分……、いや、それだと恥ずかしいから、あとせめて十分我慢しないと！ それからおトイレに行かせてもらえば……！)

それまでに、果たして水風船のように膨らんでいる膀胱で持ちこたえることができるのだろうか……？

想像して、心が折れかけてしまう。

その隙を、尿意が見逃してくれるはずがなかった。

――プシュッ！

「ああ！」

希美は小さい呻き声を漏らしてしまう。

チビッた……にしてはちょっと量が多すぎるかも知れない。

クロッチの裏側に、じんわりとした温もりが広がっていき、お尻の方まで温かくなってしまう。

(おまたヌルヌルして気持ち悪いのに……っ、おまたに力が……うう！)

一度漏れ出してきたしまうと、チヨロチヨロと少しずつ漏れ出してくる。

それだけ希美の膀胱は張っているし、尿道は熱く緩んでしまっている。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ！」

ちよろ、ちよろろろ……。

クロッチに取り返しのつかない温もりが広がっていく。

まだ止めれば間に合う。

ただ希美には、その力は残されてはいなかった。

それに生温かいせせらぎは、優しい手となって希美の秘部を撫で回していく。

その愛撫に、希美の身体は為す術無く緩んでしまう。
じよぼ、じよろろろろろ……。

生温かいせせらぎが溢れ出し、お尻の方にまで温かい手が伸びてくる。

(は、早く止めないと……ダメ……も、もう……っ！)

ヒク、ヒクク……ッ、

どんなに力を入れても、おまたが虚しく痙攣する。

それにおまたがチリチリするのは、昼休みに剥けてしまったクリトリスが目覚めてしまったのだろう。

大切な真珠が、生温かい手に撫で回され……、

「も、もう……はああああああああああ」

深いため息。

それは希美の心が折れてしまったなによりもの証だった。

しよわわわわわわわわわわわわ……。

シヨーツの中からくぐもった水音。

おまたから力が抜けて、勢いよくおしっこが出てきてしまっている。

お尻に敷いているスカートがビタビタに濡れる感触。

こうなってしまうと、席を立つことさえもできない。

もう希美に逃げ場所はないのだ。

勢いよく噴き出しているおしっこがクロツチに跳ね返って、おまたを撫で回していく。

その感触に頭が真っ白になる。

そしてついに、希美は言っではいけないことを呟ってしまう。

「き、気持ちいい……」

この年にもなつて。

しかも教室で……。

おもらしをしてしまった希美は、ついに背徳的な快感に負けてしまったのだ。

「あっ、ああ……、気持ちいい、よお……っ」

フツとおまたから力が抜ける。

なんの躊躇いもなくおしっこを漏らしだしてしまう。

シューイイイイイイイイイイイイ……。

シヨーツが、スカートがビタビタに濡れていき、そして内股の間に生温かいせせらぎが

生まれる。

脚の間をおしっこの川が流れていき、そしてついに。

ぼた、ぼたぼたぼた……。

レモン色のせせらぎが、ナイアガラの滝のように床へと落ちていった。

シンと静まりかえった教室に、水が弾ける音が響き渡る。

「誰だ？ なにかこぼしたのか？」

近くの席の男子が気づいたのか、キヨロキヨロと周りを見回す。

その周りに座ってる男子も、女子も水源を探そうとキヨロキヨロと見回し……、その視線のすべてが希美へと結ばれるまでには、そう時間はかからなかった。

「み、見ないで……」

じよぼぼぼぼぼぼ……。

なんとか絞り出すものの、希美にはおもしろしを止めることはできない。

ただお行儀よく座って、すすり泣くことしかできなかった。

「すうん……っ、ううっ、見ないで……見ないで、よお……っ」

涙を流し、鼻水が出かかってすすり上げる。

その声が、妙に教室に響き渡る。

それほど教室は静まりかえっていた。

ビシヤビシヤとナイアガラの滝は途切れることなく落ち続け、希美が座っている椅子は、すっかり濃いレモン色の湖に沈んでいた。

夏の蒸れた教室に、ツーンとした恥ずかしすぎるアンモニア臭が漂い出す。

湯気ができそうなほどの濃厚な香りだった。

「ううっ、ぐず……っ、も、もういやだよお……っ、いやだよお……っ」

この瞬間に、この世界から消えられたらどんなに楽だろうか。

この世界にたった一人だけになってしまったかのような……そんな孤独感に襲われる。

それでもジョボジョボと生温かいせせらぎは流れ続け……希美に追い打ちをかけていく。

「うっ、うああああ……止まって、よお……もうおまたに力が入らないのに……っ、早く

終わってよ……ううっ」

レモン色の筋がふくらはぎを伝い、靴下に染みこんでいく。

そのせせらぎは、上履きの中へと染みこんでいき、教室の中だというのに靴がグチヨグチヨになってしまう。



「気持ち悪い……気持ち悪い……よお……っ」

おもらししてみんなから注目されているというのに……。

それなのに希美のクリトリスは勃起し、乳首はブラの裏側でツンと上向いている。

希美は羞恥心のあまりに昂ぶってしまっていたのだ。

「見ないで……こんな私、見ないで……よおっ。」

おもらしをして一番つらいのは、漏らしてしまっても逃げることさえもできないことだ
と思う。

どんなに恥ずかしくても逃げることもできず、ただ泣くことしかできない。

しかも下着がお尻にペッタリと貼りついて責め立ててくる。

「うぐっ、ひっぐっ、……もう、もう嫌だよお……っ」

すすり上げるたびに乳首が擦れ、クリトリスからは微弱電流が走り……そんな姿を見られながら、ようやく希美の失禁は終わりを告げた。

すべてが終わるころ……。

その頃には、教室中に希美の生温かいアンモニア臭が満ちあふれ、レモン色の湖は隣の席を沈めようかというほどに大きく広がっていた。

「あんなに溜めてたのかよ……」

「小便臭くて涙が出てきそうだぞ……」

「女子の小便も臭いんだな……」

ヒソヒソ声が心に突き刺さる。

それでも下半身を濡らした希美は立ち上がることさえもできない。

そんな、永遠にも感じられる時間……それは実際数秒ほどしか経っていない。

保健委員の女子が立ち上がると、希美の手を取ってくれる。

なんとか立ち上がると、スカートからポタポタと恥ずかしい失敗の証が垂れてしまうも

……。

希美は保健室へと連れて行かれるのだった。